

奨励賞

インダスの風

西軽海町 山 勝三

中国領チベット高原を水源とし、下って世界第二の高峰K2（8611^{メートル}）を盟主とするカラコルムの峰々の氷河の水を集め、広大なパキスタン平原を縦断して、遙かアラビア海に注ぐ大河インダス。

紀元前三千年〜千五百年の昔、その中流域には世界古代文明のひとつ、インダス文明が花開き全盛を誇ったが、今は砂に埋もれ廃墟と成り果て、全長三千二百キロに及ぶその流域にはインダスの乾いた風が吹き抜けるだけ。一帯に住まいする数千万人余の住民は「明日は明日の風が吹く」とばかり、その日暮らしの物質的には何も無い、アラールの神頼みの気楽な日々を繰り返している。

国際NPO法人HGC（ヒマラヤングリーンクラブ）の一員として、二十余年余前、そのイスラムの国、パキスタンの最奥

地に植林を進めるボランティアの一員として遠征した。K2、ナンガパルバット、ガッシャブルム、チョゴリザなど、カラコルムの八千^{メートル}峰の登頂を目指して世界から集まる登山隊。その彼らに登山装備と食料の運搬のため雇われた現地のポーターたちが、燃料にするため登山路周辺の木々を伐採した跡に出来たハゲ山に、再び緑を取り戻すため植林するのがその仕事である。

成田から北京を経由して世界の屋根、ヒマラヤを飛び越え、パキスタン北部の首都、イスラマバードへ入る。ここから中国国境ヘインダス河に沿って深い懸崖の中を切り開いた荒れ道を延々と車で走り、標高三千^{メートル}近いカラコルム山群の麓にある寒村に着く。この地は電気もなく飲み水も谷川頼みの、遠く文明から隔絶された最果ての地。人々は泥と藁で固めた家に、家畜と同居の生活を日々、飽くことなく送っている。

この物質文明隔絶の地にアズの花が咲きこぼれる春先、遙か日本から私を含め定年リタイア組十数名が乗り込んだ。集落地近くの雑木林に持ち込んだテントを張って即席の住居とし、広場の片隅に穴を穿ってトイレに代用。ここに約一カ月間、起居。

毎日、近くのインダス河に沿った荒地に徒歩やトラックで移動して、クワやスコップを振るい、穴を掘り、ポプラ、アカシアなどの苗木を植え込む植林作業に励んだ。

植林作業は日本のボランティア隊だけでは手が足りず、HGCが日当を払い、近辺の現地人を雇って共同で行った。インド系の深い彫りをした顔の彼ら一人ひとりとは、カタコトの英語で話しかけるとニコニコとして、素朴で愛想も良い。しかし、作業の集合時間は守らないし、作業を始めても動作はきわめてスローで非効率。だが観察していると、決して悪意があったり横着のためそうしているのではなく、どうもそれが自然体なのだ。時間は悠久にあるのに、大自然を相手に時間に縛られ、何をせかせかと動き回っているのかと、真面目な我々のシゴト振りが不思議でならないようだ。

その彼らに作業に関わる物事を指示したり依頼したりすると、常にかえってくるのは「ノープロブレム（問題ない）」のひとこと。そして結果は例外なく問題を残したまま終わる。しかし、そんなことはどこ吹く風。全く気にしている風はない。しばらく付き合ってみて、この考え方、行動は、

厳しい自然や貧しい生活の中で生きる者の、生活の知恵なのだとしずつ分かってきた。先のことをあれこれ考えるより、「なるようになる」と成り行きに任せた方が、万幸、この世は生き易いのだ。私のように長年、大企業の管理システムに歯車の一部としてはめ込まれ生きてきた、能率至上主義の人間にとっては、最初、理解しがたいことであつたが、たった一ヶ月の短期間なのに、現地の厳しい自然や、文化的に何も無い生活条件に慣れてくると、次第に気にならなくなつて来るのが不思議だつた。

しかし、こうした彼らも、日々の生活を律するイスラムの教義、慣習に関しては厳しく正確に対応する。一日五回にもわたるお祈りの時間になると、場所や仕事に関係なく、その時、どこで何をして居ようと、何処ともなく聞こえてくるコーランの声に合わせ、全員が寸分たがわず一定時間、土下座してアラーの神にひたすらお祈りする。

夕刻、丸一日にわたる植林作業に疲れ果て、キャンプ地に戻る。アズズの香が漂い、インドスの乾いた風が汗ばんだ頬を吹

き抜けていく。仰ぎ見る天空はるか、氷河に覆われたカラコルムの峰々が夕日に染まりバラ色に輝くとき、物質があふれ何ひとつ不自由のない安楽な日本での生活が、インドスの風によつて吹き払われ、一日一日と、遠のいていく。